

パ〜プル

第42号

高村昌憲 個人誌



目次

パープル 第42号 目次 (二〇一三年五月二一日)

高村昌憲・個人誌 <Takamura Masanori : Kojin-shi>

詩

- 原木の桜 高村昌憲 (3)
春の風 高村昌憲 (3)
皇帝ダリアの誘惑 高村昌憲 (4)
風の音 高村昌憲 (5)

翻訳詩

- アラン『ガブリエル詩集』 (九) 高村昌憲 訳
 月 (6)
 灰色の朝 (7)
 トレベロン (8)
 十二月の朝 (9)

評論

- 初期プロポ断想(二十五) 高村昌憲
 1 王の力と富 (10)
 2 軍隊と神と市民 (11)
 3 結婚 (12)
 4 ソクラテスの勇気 (13)

編集後記 (14)

(表紙の写真は皇帝ダリアの花)



河津川に咲く河津桜（2013年3月8日）

原木の桜

高 村 昌 憲

川縁の河津桜の下を歩く
三月の寒い日にも咲く花だから
少しばかり注目されて咲く
出発点は川原に咲いた変異から

河津川の川原に咲いた変異種が
発見者の庭で今も原木の桜が咲く
種を分けた木々たちは堤で舞うが
何時も先駆者は孤高のままの原木

春の風

高 村 昌 憲

自然を見ていると忙しくない
何故なら地球の動きに戻るから
瑞々しい麦穂の形が懐かしい
驢馬が引くパン屋さんが来たから

自然が気になっても急がない
人間が出来ることは少しだから
小さな緑が生まれると心が柔らかい
春の風が憎悪の殻を破ってくれるから

皇帝ダリアの誘惑

高 村 昌 憲

天気の良い休日には散歩に出掛けよう
皇帝ダリアの花を見ようと上を向いた
頭上に咲く淡い色に近付きたいと思う
思えば下ばかり向いたような生活だった

駅まで歩いて行く時にも道ばかりを見る
通勤電車に乗る時も足が気になっていた
椅子に座る時も書類を見る時も下を見る
目先に集中する時は何時も下を向いていた

もう下を向かないで良いと皇帝ダリアは言う
尻込みしていた地平線が諸手を挙げている
健康を考えて大股に歩いた方が良いと言う
思えば下ばかりが気になったが花を見上げる

水平線を目指していた頃には無かった花だ
今を凝視する記憶の裏側に幽かに残っていた
三十八年前に失った懐かしい海水の匂いだ
顔を上げて遙か遠くに集中することを覚えた

下を向く生活よりも上を向く両眼を持つと
起立する孤高の薄紫色の花が教えてくれた
手が届く処よりも手が届かない処を見よと……
思えば下ばかりを見てきた三十八年間だった

風の音

高 村 昌 憲

思考することとは如何なることなのだろう
心理学は対象となるものを観察するだろう
観察した結果は思考の結果と同じではない
現代は心理学の時代であり現代に思考がない

小説の最高傑作は全てが悲しい話である
小説は全てが心理的であるから悲しくなる
出来事によって私たちは悲しいのではなく
自分自身のことを繰り返し言うから悲しくなる

憂鬱に陥っても気分が良くなるものがある
それは対象を欠いた〈想像上の不幸〉である
それは最早幸福への幻想であり思考ではなく
自分を静かに考えることがない狂気である

大切に聴くは幻想や狂気であってはならず
対象を良く見ようとする時に思考すること
思考している自分を湖面に映る山頂に見ず
思考とは対象と自分の間を循環する風の音

その時共同組織に繋がって行くのが思想だが
そんなものは混乱であり騒動であり支離滅裂であり
思考する者は訂正しながら立て直そうとしている自我
整理して秩序立てて楽音を聴きながら行為する小鳥

月

月の優しい視線が蒼白い夜に光り
あなたはオパールを浴びて好むのは
この回転する地球の相次ぐ眠り
私は裸になった枝と枝が交差する中で
傾きかけた円盤のあなたのことを思う朝

あなたがそれを知るのは辛い目覚めの時
私の心が「否」と言うには余りに違う夢
私は起き上がり 思考し 希望が生まれる
不思議な言葉のような親愛なる名前を言う
この甘美な苦悩の思い出を 甘美な夜の
期待と結び付けるが それを白日に晒すあなた

親愛なる月は私たちが若かった時の愛の証人
あなたが今 乳白色の光に映しているのは
何時も高い波の流れるような髪の毛のうねり
あなたが触れる髪の毛の先には心臓が眠り
多分 海の味がするうっとりさせ唇は
半分だけ開けた口に出して一つの名前を生む
多分 狂ったような鼻孔の発する音は
夜に匂う昔からの香水を探し求めている
おゝ月の光よ 退屈が眠る私の家の入口を照らせ
私の希望と溜息と誰もいない砂漠の上に
放擲したむなしい抱擁を照らせ
夜の家に入ってくる優しい光線が作るのは
優しい音を窺って保留になった愛
彼女の夢と 吐く息と 遠慮がちな喜びは
絹の梯子の上で遠慮も無く揺れている
あなたの面影からはふんわりとした亡霊が生まれ
そっと忍び込み 身をかがめ 日に焼けた金色の眉と

絹のような瞼と 眼に見えない光に溢れた
眠っている眼を掠めるのを夢見ている
折りたたんだ腕の隙間には甘い夢がある
柔軟な歩き振りと幸福そうな足取りにならって
曲がった線がゆっくりと解かれて生き生きとなる
恋する夜に夢見ている処女のように……

(L・Gの詩集のために 一九二九年十一月十八日)

灰色の朝

おゝ十一月の悲しい月は
静かな朝に涙を流す！
さようなら 赤褐色の秋よ！
暗い部屋には明けの薄明

あなたの進路は煙のように曇り
おゝ霧の立ちこめた大洋よ！
おゝ旅立ちよ 大口を開けた深淵よ
私の恋人を何処にやったの？

大変にきれいな姿をした
私たちのイメージは長く続くの？
悲しいかな！ 化粧をした眉には
何という憂愁の魂なのだろう！

あなたは柔らかな外套を着て
疲れた体から読み取れたのは
二滴の水のようなあなたの両眼が
言いたかった その未来のこと

(ルイーズ・ガブリエルへ 一九二九年十一月二二日)

トレベロン

美しい両眼よ 花々が咲くずっしりとした土手で
あなたは涙を流すような未来を考え込んでいたの？
美しい手よ ずっしりとしてぼやけた幹の上で
あなたは力強い一押しを試してみたの？
大地と人間の重さのぼんやりとした関係
肉体の赤い炎 欲望が怒らせている
沈黙した自尊心の遅鈍な望みを
若い魂よ あなたは昔からの苦悩の重さを
臆病な愛や冷静な欲望の重さを
窪んだ道に沿って足を引き摺って量ったの？

それらの幹は毎年冬になると嵐に耐え
波間に引き裂かれる岩場 崩れる防波堤
苦しめる荒野 締め付けられた両腕のすべて
折り曲げようとする努力 啞然とする欲望
注意深いあなたの眼は一つの星となって見抜く
待ち伏せした刺はあなたのヴェールを引き裂いた
躊躇した女の猟師 あなたが行く道を探し
ぼんやりとした薔薇色のあなたの眼差しの奥に
それらのすべてがあなたの苦い翌日を梳いているの？
あるいはあなたは悪賢い姿をして
たった一つの欲望と運動の力が強くて
風に弄ばれたヴェールのように自分の道を探すの？

時には言葉という生き生きとした輪の中で
退屈な管理人が幾つもの役を配分していた
魂の閃きが消えた肉体と肉体の間で
先端を光らせながら ぼんやりとした周りを
あなたはまるで探していたかのように一瞬の間
物思いに耽ったあなたの優しさと本当の惨事の影

節くれ立った楡の木立の下の曲がった道に
木いちごや石ころだらけの土手の日陰に
疎らで気まぐれな黒と白の色をした雌牛
細い足は枝に軽く触れると向きを変え
その角は汚れが無く 大きな眼は神秘的で
その深淵は多分無関心であるか 好奇心が強く
黒く揺れ動くその泉の波紋も震えているが
渦は無く 大きな影に幾つもの事物は消え
愛のことを尋ねても誰も答えない

あなたは切株になるまでは雌牛だ
食事の時間には煙でできた網を真珠の空へ上げ
あなたはそれを吸い あなたの鼻孔が渴望するのは
別人の奇妙な空腹と 別人の脅威
灯が点り あなたの睫毛は瞬き
その辺りの浜辺一帯の海のお喋りよりも
大空の上はもっと変化し 雲の端から落下し
あなたは探す そしてあなたの従順な動物の血は
実現可能な善悪をすべて保留にしてあなたを変え
足の上には水の精ニンフと月の女神ダイアナ
そしてあなたに従順な蔓植物の動きの中で
期待する幸福で震えるこの空しさの中で
あなたは欲望を抱いた柏の幹を描く

長身の疲れた歩き振りは彼なの？
抱締めた力と柔らかい演戯は勿論
彼自身のようにであり 感動そのものを目指している
遠くに見える揺り椅子はまだ見ぬ彼自身を
心のままに眠らせているようにあなたには見え
はだけた胸をしていて何か穏やかな眠りで
もしも彼には両眼しかなく ゆっくりと下に向けば
時には火が見えて その光がそっと滑り込み
灯台のように突然に 威圧的に 生き生きとして
野蛮な海賊の首領が突然に抱締め

無情に遊ぶ夢を時々は見せてくれる

おゝ雄牛の項よ 優しい両手の女王よ！

おゝ額よ ゆっくりと思考する秘密の大箱よ！

おゝ胸よ 蓄えられた力の坩堝よ！

おゝ登攀と抱擁のための足よ！ そして襞には

私の頬が蒼白くなった野生の匂い

思考はなく その次に美しく切られたあなたの顎

私の両手を切ることを約束した大理石の果実よ！

それは彼なの？

あなたは断崖 そしてあなたは赤い水平線

あなたの前に存在している私は遠くて

破滅の淵にいる兄に奇妙な音を出している

運命は多分あなたがそれを終らせるのを望んでいる

おゝ海よ 私はあなたを恐れる！ でもそれ以上に愛する

あなたの満潮と引潮の動きを前にして

遠くの浜辺まで跳んで行く夢だけを見るのは誰？

この不毛の荒野と荒々しい岩場は

既に私の足元に頑丈な支えを作っている

そうだ 私の鼻孔まで昇ってくるこの野生の

強烈な匂いを私は拒否することができる

おゝ大胆な心よ あなたは危険に満ちた運命しか感じない時

逃げることは恥でしかないと思っていた

あなたに合図せよ そしてあなたは神の勇気を感じる

いいだろう！ 私は主権者の力を信じている

夜は更ける おゝ憔悴よ おゝ平原の沈黙よ！

砂浜には優しい囁きがしてあなたは眠る

あなたは身を隠し 螺旋に巻かれて熱も醒め

水のように混ざり合うざわめきに触れ

岩礁の上にはあなただけの大洋が生まれる

あなたは怠惰な夢を忘れて喜んでいる

その農家と曲がりくねった道 傾いた船が
行き先を変える船腹のように そして
あなたの柔らかな亜麻布 帽子についた絹のスカーフ
柔らかな肌の皺に 今でも現れているのは
散歩道 そして金色の浜辺の汀の上で
あなたは自由であり 大好きな逃走を夢見る……

あなたの神秘的な裸体の深い襞の
冷たさからは見知らぬ欲望が生まれ
乾燥して固く 脱毛したような岩肌の端で
太陽に燃えた草のようにざらざらしている
おゝ清い泉よ！ おゝ渇きよ！ おゝ傷ついた喜びよ！
おゝ血の泉の堪え難い侵入よ
拒んだり約束している燃えるようなロゼワインよ！

しかし 眠る魂の深い溜息は
あなたの深淵から両眼で見る夢に遡り
それは力強く微笑んで幸福な視線である

あなたは眠り 朝は蒼白い姿を幾つも洗い
大空には柏や榆の樹が描かれ
運命は幹のように固く節くれ立っている
あなたは敢えて征服者になるの？ そして素早い動きで
逃亡者の当てにならない時間を夢見ているの？
あなたの両手には自由を奪われた何分もの時間があり
逃亡しているこの世に希望は当てにならないの？
あなたは盲目の世界の恐ろしい沈黙の重さを
身に付けて何時もおどしているの？
そして人間はさらに重苦しくなるの？ そして陰謀はうんざり
そして未来に誘惑されるの？ そして過去が嫉妬している

そうだ 私は思い切る

しかしあなたの心は？　そして宮廷人の
権力という甘い幻影があなたを女王にするのは誰？
思い上がりの苦しみによってあなたの苦しみを治すのは誰？
あなたの不安気な心に轟くのは嵐なの？
あなたの裏切りは貴重な財産を全て押し潰し
汚れた魂の人の悲しみを前にして
愛されている証拠を見捨てたことで償っているの？

恐縮しているの？　と裏切りの海と重苦しい空が言う
そして嵐が盲目にして　雷雨が耳を聞こえなくする
恐縮しているの？　と浜辺と口づけしながら彼が言い
そこには涙が幾滴も落ち　まるで顔の上のようだ
その岩は無駄なことに　欲しくて堪らなく泣いている
おゝ額の皺は絶対的な命令を刻んでいるのだ！
あなたの瞳は美しく　慎み深く秘められた神への奉納よ！
旨いもの好きの口には快樂の翼
真面目一方の下らない仲間たち
威張り返った顔で骨の折れる計画に
大変に熱心な共犯者たちはついに弱者になる！
ここでは西風がストライキのようにあなたを打ち
大洋の眩きがあなたの方に駆け上がる
私はミルクのような処女で　虚無の力に支えられ
私はあなたの娘になる　おゝ海よ　泡のうねりよ
私の細い手は海藻　あなたは霧の色
おゝ私の歌よ　あなたはそれが愛する両眼を描く
あなたが恐れるのは何？　それに祝福を！
始めから私は愛しい大地のあなたを許す

運命はそれらを花で飾った荒野に集め
苔で緑色になっているのは暗い堀端
両眼で見る大空の赤い稲妻を誰もが言った
神のイメージに抵抗するのは心なの？
彼らの手は同じ刺によって血を流していた

(訳注) トレベロンは、ブルターニュ半島先端のプレスト付近にあるビスケー湾に臨むトレベロン島のことと思われる。

十二月の朝

怠惰な曙を待ちながら私は夢見る
乳白色の明かりのヴェールを取り除く白い夜
淡黄褐色のジュピターと蒼白い星たちは
埋もれた日々を測りながら落下する
〈時間〉は次々に毎分落ちていく
このようにして私たちの思考と戦いは去り
港は遠くの水平線に消えていくようだ

このようにして寒い季節の大空を前にして
役に立たない武器を落としながら
蒼白い女の旅人は変わり 涙はもう流さない

この惑星は回り これからも回るだろう
恋人たちの冬そのものは当然のように過ぎ
そして既に 曙が頭上を白くしている
惑星は暗い深淵の上に線を引ながら戻り
泡を立てている航跡は直ぐに元に戻り
威圧的な船首を見張番の方に向けながら
泡立つ波の上で押し潰された襷に駆けつける
そして私はとっくに待ち切れないあなたの足音を聞き
それは大地を思い出し 稲妻は陽気だが
あなたの視線は臆病で 待つことに疲れていた
その美しい見張番は傾き 突然に極めて好意的になる！
すべてが心開かれた欲望によって突進する
もう直ぐくる夏を前にした草原のように
香水 しなやかな織物 私は愛するものをすべて待つ
このようにして五月には同じ薔薇が咲いている

(一九二九年十二月二日)

1 王の力と富

二〇一三年二月末にベネディクト十六世がローマ法王を退位して、同年三月十三日に新法王フランシスコがコンクラーベにおいて選出されました。コンクラーベとは新法王を選出するための特別な選挙のことで、八十歳未満の枢機卿たちによって行われます。約十一億人と言われているカトリック教徒の頂点に立つ者の選挙ですから、色々と細かい規則や慣習があるようです。例えば、枢機卿たちは新法王が選出されるまで外部との接触が禁止されているとのこと。選挙によって決まればヴァチカン宮殿の煙突から白い煙が出るとのこと。因みに、決まらなかった日には黒い煙が出るとのこと。「注目すべきことは自由に関して最も長い経験を持つ国民が、まさしく従属の習慣というものを最も細心に持ち続けている者であるということ。恐らく、何らかの合理性があり、宮廷で着るコートの下には沢山の合理性が隠されています」とアランは一九〇八年二月三日のプロポで書いていますが、法王庁についても同じことが言えると思います。

選挙の時は他者との接触を断つことが健全であるとの判断が法王庁の枢機卿たちの間にはあり、それが合理性のある習慣となっているのです。判断するのは集団ではなく個人でなければなりません。集団には思考も苦痛も喜びの感情もありません。従って如何に判断するのも分からない筈です。集団は数学や統計学に基づいて選択するのですから、まさしく個人の健全な良識は置き去りにされて行きます。「まさしく従属の習慣というものを最も細心に持ち続けている者」が、集団を支えて行くことになります。それが有益であると判断します。しかし、この様にして集団が誕生させた王を如何にして国民はその力と富を手に入れるのでしょうか。この疑問に対してアランは次の様に書いています。少し長くなりますが引用します。

「私は或ることに気付いたのですが、人間が野心を持って高慢になればなる程、権威の徽章を軽蔑するということです。謙遜家たちは緋色の衣の下に隠れて自分でない位に素晴らしいと思える服装で子供のように陽気に散歩します。どんなに驢馬たちが聖遺物を運んで過ぎゆくのを私たちが見ているでもです。余り笑ってはいけません。人が言う限りでは、彼らは驢馬ではありません。彼らは、自分たちの心の裡の感情に反して外見を装っても尊敬されることを単に想像したいだけであり、恐らくそのことに少しは価値があると考えています。彼らの習慣は甲冑のようなもので、彼らを支えています。結局のところ、多分それは有害であるよりも有益です。

実力があると実際に感じている人間が、兎に角、習慣に何の義理立てもしたくないのは事実です。彼は徽章が無くても認められることを強く望みますし、素っ裸で喝采されることを強く望みます。ナポレオン一世は灰色のフロックコートを着ていました。もし栄華を公式に回復していたなら、その後の機構は匙を投げたくなっていたでしょうし、大変に良く糊の効いた昔の服装で全く孤独になっていたことでしょう。今日でもあなたは、力があって計算高い人間が上着を着てポケットに両手を入れて、勲章を受けないのを認めます。

イギリスの栄華もこの様に解釈して下さい。その栄華は、人間を苦しめながら機構を崇める方

法であると思います。若い娘でも青二才でも老人でも病人でも誰でも構わないから彼らに栄華を与えてご覧なさい。彼らはその中で王になります。そのコートは人間が隠れるには余りに豪華です。強い国民は何時も偉大な王を持つ、とは最早はっきりと何も言えません。それはそのコートが示しています。お前は強い、何故なら王であるからです。灰色のフロックコートや小さな帽子は次の様に言っているようです。お前は王である、何故なら強いからです。この様にして宮廷のコートを着ないことは知恵の半分でしかありません。力や富は国民から王へ行き、王から国民へ行くことはありません。〈イギリス〉は決して主人に喝采しません。自分本来の力に喝采し、劇場にいる王の両肩の上を越えて広がって行きます」。

アランは、〈自分本来の力〉が本当の栄華を生むことを指摘しています。人々から与えられた栄華は、自分をコートの下に隠して王になるが、やがては自分自身を失います。従って王の力と富も、自分本来のものではないのですから、国民へ行くことも不可能になります。

アランの思想は、物事を抽象的に思考して大局的な対象に向くことはなく、個々の現実の事象に働きかけていく行動の力を基調にする側面があります。例えば、知人の庭にある何本もの榆の木がヒゲナガハムシという毛虫の被害にあって全て枯れて仕舞いそうになれば、自分の力で出来る範囲で良いから毛虫を退治して、榆の木を二本でも三本でも良いから救うことが大切であることを一九〇九年五月五日のプロポで説きます。あるいは選挙制度においても、集団に投票するような比例代表制には終始反対しており、一九一二年二月七日のプロポで次のとおり書いています、「郡選挙の投票で、〈比例代表制〉に反対ですし、行政上の専制君主に反対であり、国家の秘密に反対するのは急進的平等のためであり、そして服従の代わりに予測、情熱、熱狂を猟犬の本能と同じ位に明確になるまで発達させます」。政治は、政党や組織という集団が権力を握るためにあるのではなく、集団は個人が豊かに安心して生活するためのものである限り、選挙においても個人が個人を選ぶレベルになくしてはならないとアランは考えます。個人が集団を選ぶことは、すなわち一人の個人も不在の抽象的な対象を選ぶことになり、誠実な市民としての平等である急進的平等から人間を選べなくなり、延いては力や富は現実の人間へ「行くこと」が曖昧になります。

人間の評価は個人によるのであり、所属する団体や出生や学歴等に余りに偏重すると、現実を正しく見る眼まで失って来ます。我が国の選挙も、力と富が人間へ行くためには支援団体とか組織票という考えから離れて、ローマ法王を選ぶように個人が個人を選ぶための選挙制度にもっと重心を置くべきであると私は考えます。（完）

2 軍隊と神と市民

「軍隊や戦争に関することは憤然と議論されて来ました。誰かがその話を始めると皆に広がって行きました。その途端に騒動を認識して皆が沈黙します。人々は微笑しながら好感を持ってお互いに見つめ合います。何故なら憎んでいるのではなくて、少しずつ意見を戦わせることを覚えたからです」と一九〇八年二月十三日のプロポは始まりますが、当時のフランス社会はクレマンソー内閣によって対ドイツには強硬的な態度で臨み、国内の労働運動やモロッコの民族運動に対しては武断的政策をとっていました。従って軍隊の出動機会が増加し、戦争の脅威も増大していく中で、アランは〈賢者〉を登場させて次の様に言わせています。

「今は誰も平和を愛していません。今は世界中が戦争を愛しています。そうです、あなた方は皆良き軍人です。主義主張が正しければ、もうやるべきことが無いと皆が信じています。大変に強く心を打つこととは、板に釘を打ち付けるように行為に思想を加えるためのものです。あなた方は平和と戦争で議論が分かれると思っていますが、そうではありません。実際は正義と不正についての議論をしているのです。あなた方は理想を思い描きますが、それが何よりも良く生きる方法です。そして、あなた方の結論は、何にでも理想に向かって走らなければならないことであり、必要とあらば乱暴に押しのけ踏みつぶして彼らの胸で柵を作る人々でもあります。テントの中で熟考する残酷な指揮官たちのうち或る者は何時も征服することや何でも力尽くで手に入れるために西へ行くべきであり、他の者は東へ行くべきであると言っているのが聞こえるように私には思えます。或る者は軍隊を滅ぼしたがっていて、軍隊に対しては軍隊を招集することを話しています。別の者は、本当の原因があることを信じていると言いながら、軍隊を没収した人々の將軍になりたがっています。それに成功するには、彼は軍隊を再び招集することを話しています」。

軍隊には個人の判断が求められません。何故なら個人がばらばらに行動することは敗戦を意味することになり、一人ひとりの不幸に繋がって来るからです。個人は自由を殺して幸福を手に入れようとします。従って、個人は自分の判断を保留して〈神〉の判断を受け入れるようになります。自分では判断できない〈神〉の判断であり、そのための説教は余りに長く続いているのです。あるいは「トランペットを鳴らしなさい。騙されたと気づきながらも、人々が繰り返すのは廃墟の上に建て直され始める蟻の執拗さのようなものです。神は眠っていて、上空にいるとあなた方は恐らく信じています。武器の音に目覚めて、最後にはその力をより大きな正義に与えることを期待しています」と賢者は言います。しかし、賢者が言うには神はおりません。存在しているのは市民であり、市民が望むことは正義と平安であり平和であると賢者は言います。戦争を煽り志向するのは〈テントの中で熟考する残酷な指揮官たち〉です。市民たちは戦います。アランは後年の第一次世界大戦の戦場で書いた『文明国の戦争で真の原因になるもの』の巻頭言に、十八世紀のモラリストであったヴォーヴナルグの言葉「悪徳の人は戦争を煽り、美德の人は戦う」を記載しました。市民は戦争を煽る者に注意し、警戒しなければなりません。そういう意味で私は敢えて言いたいのですが、現代の我が国にも戦争を煽る行為は色々と見受けられます。北朝鮮の脅威ばかりでなく、中国や韓国との国境問題を憤然と発言する者にも警戒する必要がある

ます。そして、それらの発言や行為を一方的に公表するマスコミにも責任が無いとは言えません。何故なら、戦争を煽る者の発言だけを公表するのではなく、その都度冷静な市民の声も併せて公表すべきであると私は考えるからです。そうでなければ片手落ちというものであり、マスコミまでもが戦争を煽る者のお先棒を担ぐ結果になって仕舞います。

プロポの〈賢者〉も次の様に市民を励ましています。「私（賢者）はあなた方に経験は大変に長く続き、証明が行われると言います。決して神はおりません。上空は空白です。神の力は盲人や聴覚障害者のもので、眼に見えませんが聞こえもしません。神の正義はそんなにも遠くにありません。もしも神がいるとするなら、それはあなた方の心の裡にあります。それ故に人間でいて下さい。あなた方の観念を捨てることに慣れることです。正義は大空から冠のように力を持った頭に降りて来ません。正義はどのように生まれるのでしょうか。私には分かりません。少なくとも私が知っていることは、都市は市民のためにあるということです。ですから一人ひとりが働くのは正義と平安が人に与えられるためであり、何よりも自分自身がまさしく平和であることです。そこには身を捧げなければならない戦いがあります。やらねばならない革命があります」と言ってこのプロポは終わっています。

アランの実際の政治姿勢は、決して暴力を容認する過激なものではなかったのですが、〈戦い〉や〈革命〉は個人の思想として急進的現状を受容するものでした。従って、現状に対しての抵抗と服従は決して矛盾するものではありませんでした。ルアン時代のアランの教え子であったジャン・テキシエールは、次のアランの言葉を引用して、真の市民は決して権力の制御を放棄しないことを指摘しています。「抵抗と服従は市民にとっての二つの美德です。服従によって秩序を確かなものにします。抵抗によって自由を確かなものにします。抵抗しながら従うことは、全くの秘密ごとです。服従を破壊するのは無政府主義です。抵抗を破壊するのは独裁です」。無政府主義にも独裁にも現状の解決を求めなかったアランの政治思想は、あくまで国や政党や集団に自己の全てが組み込まれない健全な精神を所有する個人に対して向けられた思考であり信念であったと言えます。（完）

3 結 婚

結婚は人間としての本質部分を形成するようです。職業が人間の世界観を形成するように、結婚は人間の人生観を形成し、人間の生活を変えるようです。「結婚を考えると、先ず生活を変えます。そして、それは大変自然なことです。不幸は、言葉遣いと考え方と性格が殆ど同時に、何時も信じられない位に早く変えて仕舞います。上辺を取り繕うこと、つまり自分自身を半分騙し、屢々他人は全て騙すこともあると理解して下さい」とアランも一九〇八年二月二四日のプロポを書き始めています。

結婚はあるが儘の自分を、あらねばならない自分に変えようとしますし、反対に不幸は不幸という気分によって殆ど同時に言葉遣いも考え方も性格も降下させて行きます。それらを上昇させるには、不幸から抜け出すことです。それは実際よりも良く見て貰いたいと努力して演じることであります。私たちはこの喜劇を劇場などで何度も眼にしましたが、それは戦いではありません。もしもその時、相手を欺いて勝利を手に入れたなら、何時までも優位でいられます。でも結婚はそうではない、とアランは言います。長い間相手を欺くことは不可能です。給仕として立派でも人間として偉大でないとするれば、そういう平凡な人間がどうして女性の前で演劇の英雄を演じることを望むのでしょうか。二人の間に約束がありながら、約束以上のことを行うとするなら、約束は殆どする必要がないでしょう。

しかし、決して許されないことでも風習は生まれます。殆どどの家庭にも不文律があって、それに従って家族の一人ひとは家族を楽しませたり喜ばせたりするには嘘も付きます。思いやりで整えられた会話に真実の言葉があります。結婚はあるが儘の事実を言えば良い訳ではなく、ギリシア神話のイフィゲネスが女神アルテミスの怒りを鎮めるために父の命で人身御供になるように、どのようにすれば人生が変わるか誰でも良く知っているのです。しかし、男性も女性もお互いに何時までも相手のことは知らない儘でいます。ですから一年ごとにやり直すことになり、大変な試練になるとアランは書いています。

「従って、それは必然ですが、妻は夫を犠牲にして学び、自分の魅力を少し失う度毎に経験を積むのです。神が金色の粘土で創られているのを妻が発見する間に、夫は経験に次ぐ経験で神の誕生を理解するでしょうし、妻のことは無知であり、妻も自分を知りません。それ故に結婚というものは一年ごとにやり直すべきものです。そして、新たな婚約期間はそれまでよりももっと恐ろしくて大変な試練となります」と書いてこのプロポは終わっています。恐らく、夫は妻のことは何も知らないと認識することが最高の理解になるのでしょうか。何も知らないのですから、何が起っても受け入れられる筈です。「そういう女なのだ」と言うことが最高の理解になるのでしょうか。まさしく〈大変な試練〉です。

一九〇〇年、アランは三十二歳の時にルアンの民衆大学で、理系のリセの教師であったマリー・モニック・モール＝ランブランと知り合い、一九四一年十月二日にモール＝ランブラン夫人が七十三歳で亡くなるまで一緒に生活します。役所に結婚届を提出しない結婚であり、モール＝ランブラン夫人はアランが書いた草稿を整理したり出版者と連絡したり経理なども管理した秘書のような役割も果たしました。現代のアラン研究所のロベル・ブルニュ所長などがアランの未刊の

原稿を公表出来るのも、モール＝ランブラン夫人が果たした業績が大きいようです。例えば、第一次世界大戦に参戦したアランは戦場から手紙として毎日のように数々の草稿をモール＝ランブラン夫人へ送っていました。夫人はそれらをノートに書き写しましたが、赤いノートに書き写されたのがアランの死後の一九八八年にアラン研究所から刊行された『文明国の戦争で真の原因になるもの』（全面的に生前に書き直したのが一九二一年刊『マルス、又は戦争批判』）であり、青いノートに書き写されたのが一九一七年刊『精神と情熱に関する八十一章』として上梓されたものでした。

いずれにしてもアランとモール＝ランブラン夫人は、一九四一年までアランが草稿を書き、夫人が草稿を整理して出版したり経理を担当したりしていた共同経営者のような関係でもありました。従って、一九五一年六月二日にアランが亡くなって埋葬されたパリ二十区のペール・ラシェーズ墓地の墓に夫人の名はなく、一緒に眠っているのは一九四五年に亡くなった姉ルイーゼと、同年十二月三十日にアランと結婚して一九六九年に亡くなったガブリエルです。ガブリエルについては別の機会に書きたいと思いますが、彼女はアランが高等師範学校在学中の同窓生の姪で、二十歳も年下でした。結婚した時はアラン七十七歳、ガブリエル五十七歳でしたが、アラン自身はリューマチが悪化していて殆どベッドから起き上がれない状態でしたから、アフリカの戦場で恐らく介護の経験もあったと思われるガブリエルは、アランを介護するために結婚したようなものだったと思います。アランは、一九二九年にアメリカ合衆国のボストンへ出発したガブリエルのために、一九三二年までに約七〇篇の詩を創作しました。それらの詩は『ガブリエル詩集』（POÈMES À GABRIELLE）として二〇〇一年にアラン研究所から刊行されましたが、夫婦として完結される前の美しい詩句に溢れていて、幸福というものが如何なる資質を持っているのかを知ったような詩集です。私は、次のアランの言葉も思い出しています。有名な『幸福論』にはない言葉ですが、アランの幸福とは如何なるものであったのかが端的に簡潔に表されているように感じます。「イチゴにはイチゴの味があるように、人生には幸福の味があります。太陽は良いものです。雨も良いものです。あらゆる音が音楽です。見ること、聞くこと、味わうこと、触れること、それらは一連の幸福でしかありません。苦しみや痛みや疲れでさえも全てが人生の味わいです」。一九〇九年五月二九日のプロポに書かれている言葉ですが、味と味わいのように試練も幸福もアランにとっては個人のものであり、結婚によって夫婦も個人になるのです。（完）

4 ソクラテスの勇気

紀元前四二四年にアテネの人々がボイオティア地方のテバイの人々に敗北した時に、たった一人で隠遁生活に入ったソクラテスについて、アランはプラトンのように次の対話を創作しました。一九〇八年三月一日のプロポです。

「……隠遁生活に入ったソクラテスの勇気を誰かが誉め称えました。ソクラテスはその称賛を聞きながら、笑い出して言いました。「私が勇敢であるとあなたは信じている。実際にはその時私は、逃げ回っていた人々よりも勇気があった訳ではない。それというのも私は、人が敵に追い詰められて背中を的のように見せる時、武器を捨てることは危険であり、酷く軽蔑されるに違いないと見做しているからだ。私にとっては、追跡して来た連中と正面から向き合って、両眼を開けて、眉をひそめ、最善を尽くそうとする時、恐怖が背中を押しているようだ。そして、自分の楯の背後で他の防御がないとしても出来るだけ良いものを隠している者を私は理解しないが、両眼を瞑って渦巻のように混乱した中に身を投じる者よりも勇気がある。彼ら二人のうち、一方の人の方が巧みな人であると少なくとも私は理解している」。

勇気についてのこの奇妙な話を聞きながら、若者たちは痺れたようにそこに取り残されて立っていました。彼らは何時もの観念が頭から飛び去って行ったように思われました。ソクラテスの微妙でとらえ難い話を聞くと、殆ど何時もそのような結果になるのでした。従って〈シビレエイ〉という異名が付けられていました。

しかし、生真面目な人間が立ち上がって、ソクラテスに拳を突きつけて叫びました。「あなたの行いが生まれる花々や果実を火に投げ入れる場所は、何処なのか。何故あなたは自分を最も恥ずべき最悪の徳に水準を下げるのでしょうか。だったらあなたは単純で素朴であるべきであり、あなたを褒める人々に話をさせて置くべきである。何故ならその町は、少なくとも善き行いを必要としていないからだ。熱狂的な話は、やはり彼には有益である。何故、洒落を言うのか。何故、裏の話をするのか。あなたは、人々が城壁の上で戦っている間、女や子供たちと一緒に地下室の奥に隠れに行く臆病者たちに対して、如何なる言い訳も理解しないのか。ソクラテスよ、あなたはその時逃げて、今日の話をしなかった方が良かったのだ。あなたの謙遜は皮肉っぽく、その勇気は私たちに与えた善よりももっと悪いものを生んでいる。あなたは何事も良き市民として行動するが、尊敬する気持ちがなく思考し、話をする。あなたの知性は、あなたの美德というものを悪くしている。あなたは神に従うが、神を信じていない。あなたには勇気があるが、勇気を素晴らしいと思っていない。あなたは祖国のために平然と死ぬだろうが、逆説の一つを主張するためにも一生懸命になるだろう。あなたは犬に骨を投げるように、愛もなく私たちに献身するだろう。あなたの数々の美德は、その美德を無視している。〈神々〉の正しい怒りを恐れてくれ」。ソクラテスは底知れぬ沈思黙考に陥りました。既に、監獄の中では、奴隷が毒人参を粉に砕いていました」。

ソクラテスは自ら書いたものを残さなかった哲学者です。所謂〈対話〉によって 哲学を行った哲学者であり、今日、ソクラテスの思想が理解出来るのは偏にプラトンが書き残したからです。恐らくアランもこのプロポで、プラトンと同じことを行ったのだと思います。但しプラトンのように、毒杯を呷る行為は神が人間に与えた行為と見倣すことはありません。アランは人間を神の奴隷と見倣すことを許さなかった哲学者であったとも言えます。歴史上、アランはソクラテスと直接会うことは不可能であり許されない行為ですが、アランにとってソクラテスの精神と出会うことは可能でした。自ら進んで毒杯を飲んだソクラテスの精神は、不滅の魂に対する自らの美德であった筈です。パイドンの口を借りてプラトンが記した『パイドン』を読めば解ります。死ぬことが勇気ある行為でなく、哲学者の勇気とは進んで魂の不滅を証明しようとした行為でした。詩人は詩を書くという不滅の行為によって自ら毒杯を呷る覚悟を決めた者です。そういう意味でアランは歴史家を認めていませんでした。歴史とは〈現代〉を生きる者のためのものであり、歴史上の人物を死骸としか見ない歴史家を軽視していました。「これは私（アラン）が考え出した歴史の一頁ですが、それでも真実です。ことの起こりはシシリア島で、その島の中の何処かです」と書いて、一九〇九年十二月一日のプロポではピタゴラスとプラトンとアルキメデスが一緒に旅をすることになります。「しかし、歴史家はその中に入っていない。何故なら、お互いが実際に歴史的に出会うことがないなら一緒にすることは出来ない、と歴史家は言うからです。でもお互いが出会う方法は沢山ある、と私は教養のない歴史家へ説明しなければならないのでしょうか。あゝ、年表なんか私は気にしません」。

歴史家は、三人の年表を調べるに違いありません。因みに、ピタゴラスは紀元前六世紀頃の人であり、プラトンは紀元前四二八年～同三四八年頃、アルキメデスは紀元前二八七年～同二一二年の人ですから、三人が一緒に旅をする話は出鱈目であると言って歴史家はこのプロポを読むことはないでしょう。しかし、「全ては数字である」としたピタゴラスの思想は現代にも生きているのではないか、「肉体は滅びる、しかし思想は何世紀も跳ぶように生き続ける。これが真実の歴史です」とピタゴラスの口を借りてアランは言います。例えば、統計学者は数字だけでこの世を理解しようとしています。経済学者も数式によって経済を理解しようとしています。この世に法則があるとするとするなら、その多くの場合、数字で表そうとします。つまりピタゴラスは現代に生きている、とアランは言います。ソクラテスの勇気を理解しようとすることも歴史です。真の歴史とは死者を生かす学問でもある、とアランは言っています。

(次号へ続く)

編集後記

◆十二月二日（日）に東京・吉祥寺の「永谷SPACE」で開催された「風狂の会」（主宰・北岡善寿氏）に参加した。最初に、原田道子さんが講師になって草野心平についての講演があった。蛙の詩以外にも情感溢れる優れた詩が紹介された。次に、年末恒例の「川柳忘年会」に移った。題詠「近いうち」と自由詠を三句ずつ予め投句し、当日の参加者による投票での選考が行われ、全六十句の中から各々一等、二等、三等及び佳作を決定した。川柳で身近なのは各新聞紙上の投稿欄の他に、第一生命保険会社が募集する「サラリーマン川柳」、全国有料老人ホーム協会とポプラ社の「シルバー川柳」などが有名であるが、「風狂川柳」も一九九四年から毎年開催されて来て、詩人が創る川柳としてそれなりに詩人の世界では知られてきているようだ。〈川柳は一行の現代詩である〉と良く解説していた二〇〇六年六月に亡くなった初代主宰者の齋藤 恵(まもる)氏の言葉が懐かしい。当日の選考結果等についての報告は、詩誌「さやえんどう」第三九号（主宰・堀口精一郎氏）に掲載されることと思うので割愛するが、ここでは私の作品だけをご紹介します。

- 1 言葉だけ「酒でも呑もう近いうち」（題詠）
- 2 近いうち解散すれば遠い人（題詠）
- 3 太陽も維新の代替近いうち（題詠）
- 4 過労気味悪口言って元気出る（自由詠・三等賞）
- 5 口ばかり電子書籍もパソコンも（自由詠・佳作）
- 6 忘年会酒の種類を吟味する（自由詠）

（1 断り文句、2 衆議院選挙落選、3 多政党、4 お酒を呑めば尚更、5 追いつけない、6 体調を考えて）

◆二月十九日（火）に東京・新宿の「やまと」で開催された「語学友の会」に参加した。日本語学校校長のY氏や日本語教師のS氏の話聞きながら次の様な感想を抱いた。一般的に日本語教師の報酬は少ないらしい。三十人学級どころでなく、せいぜい二十人が限度のようであり、単価的に見ても報酬が少なくなるようだが、その教授法は最も進んでいると言える。コミュニケーション力を付けるための授業方法が最も重視され、或る面では色々な授業形態の中でも最先端を行っているようである。日本語を学ぶ外国人は韓国や中国などのアジアの人々が多いが、我が国では国や県等からの金銭的な支援が少ない儘である。最近の領海問題も、日本語教育への援助の少なさと関係しているように思えてならない。国際交流は先ず言葉からである。お互いに相手の国を批判するばかりでなく、自ら改善すべき点についても冷静に考えて貰いたいと思う。取分け、海外で活動する日本人教師への支援は喫緊の課題と思う。

◆四月七日（日）に東京・調布の神代植物公園で「風狂の会」「さやえんどう」の合同花見会に参加した。今年ソメイヨシノの満開は三月下旬であったので、既に殆ど葉桜になっていたが、お互いに持ち寄った酒肴で春を味わった。バブル崩壊後に〈成果〉や〈効率〉や〈活性化〉という言葉ばかりが眼についていた現代人の頭を切り換えて、花や緑や風景をゆっくり味わう体験は

、それまで忘れていた大切なものを思い出させてくれる良い機会である。一か月前の三月八日に、一足早く伊豆の河津桜を観る機会も得たが、それとは趣が違ふ花見で今年も貴重な体験をしたと思っている。

◆五月二十日（月）に東京・銀座七丁目の「ぎやらりー サムホール」で開催されている「齋藤 求 展—裸婦と風景—」を鑑賞した。二〇〇三年に九六歳で永眠するまで独立美術協会を中心に活躍し、特別功労賞を受賞した画家の遺作展である。山形県鶴岡市生まれで、鶴岡市特別文化功績賞も受賞しており、雑誌「太陽」などで活躍した文芸評論家・高山樗牛や詩人・齋藤 志を親戚に持つ家系である。画家の生前は大学や高校などで美術の教鞭を執っていた経歴もあるが、ご子息の齋藤 巖氏の話によると、後半生はやはり教育よりも実作に打ち込んでいたとのことで、晩年まで百号の油彩を描き続けていたとのことであった。その画風はあくまでも伸び伸びとしていて優雅で自在であり、優雅で自在であるためには直線よりも曲線を強調する独自の様式を確立したように思える。その独創性は、観る者に新鮮な審美性と斬新な絵画芸術の可能性を予感させている。会期は五月十七日～二五日（十一時～十九時・最終日は十七時まで）。

◆多くの詩人などから紙媒体の詩集及び詩誌等を頂戴した。生来の怠慢から失礼と思いながら殆どお礼状も差し上げていない。この場を借りて、最近ご恵贈賜った詩集及び詩誌等を掲載して深謝する。（順不同）

詩集『ボルヘスのための点景集』藤井 雅人（土曜美術社出版販売）

詩集『高田の松』和田 文雄（土曜美術社出版販売）

詩集『大きなつばら』なべくら ますみ（土曜美術社出版販売）

詩集『葛橋異聞』頼 圭二郎（土曜美術社出版販売）

詩集『House』中村 不二夫（土曜美術社出版販売）

詩集『透明体』山本 聖子（土曜美術社出版販売）

詩集『岬』武西 良和（土曜美術社出版販売）

詩集『いのちとの対話』田川 紀久雄（漉林書房）

詩集『夜の魔術師』堀内 みちこ（思潮社）

詩集『私の広尾』桐野 かおる（砂子屋書房）

詩集『晴れ渡る空の下に』林田 悠来（コールサック社）

詩集『まどろみ』向田 若子（福田正夫詩の会）

詩集『蜜柑色の空間』黒田 佳子（福田正夫詩の会）

詩集『うねるUNERU』おだじろう（石風社）

評論集『現代詩展望 VII』中村 不二夫（詩画工房）

「現代詩研究」七〇号（渡辺 元蔵）

「さやえんどう」三八号（堀口 精一郎）

「竜骨」八八号（高橋 次夫）

「千年樹」五三号（岡 耕 秋）

「駆動」六八号（飯島 幸子）

「騒」九三号（暮尾 淳）
「解纜」一五三号（西田 義篤）
「日本未来派」二二五号（西岡 光秋）
「新現代詩」十八号（中川 敏）
「ぽとり」二九号（武西 良和）
「流」三八号（西村 啓子）
「ココア共和国」十二号（秋 亜綺羅）
「新しい風」三三号（金子 秀夫）
「波蝕」十三号（荻野 央）
「ぱびるす」一〇三号（頼 圭二郎）
「一軒家」三四号（丸山 全友）
「風樹」十三号（大塚 欽一）
「ERA」通卷二〇号（川中子 義勝）
「ゆすりか」九四号（藤森 里美）
「金木屋」十三号（菊田 守）
「SUKANPO」十四号（田口 三船）
「極光」十九号（原子 修）
「幻竜」十七号（清水 正吾）
「詩界」二六〇号（清水 茂）
「文藝軌道」通卷十八号（黒羽 英二）
「風刺画研究」五八号（清水 勲）
「飛火」四三号（岡谷 公二）
「環」五三号（藤原 良雄）
「人民の力」九八五号（谷口 巖）

◆「パール」四三号は二〇一三年十一月二一日発行予定である。

高村昌憲 個人誌 『パ〜プル』 第42号

<http://p.booklog.jp/book/69724>

著者：高村昌憲（2013年5月21日）

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69724>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69724>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ